

アルカディアのピンダロス——ヴィットリオ・マリア・ビガリのボローニャ、ラヌツィ館ギャラリー天井画におけるピエル・ヤコポ・マルテッロの詩的創意——

高橋 健一（和歌山大学）

ラヌツィ家のボローニャの邸館（現在の控訴裁判所）では、当主フェルディナンド・ヴィンチエンツォ・ラヌツィ・コスピの注文を受け、一七二四—二五年にギャラリー天井をヴィットリオ・マリア・ビガリが装飾した。そのフレスコ画では二つの場所、すなわちアポロンとペガサス、ムーサを配するパルナッソス山、そしてボローニャ近くのレーノ川溪谷に位置するポッレッタが、個々の区画に象徴的に表わされている。その図像プログラムは、劇作家で詩人のピエル・ヤコポ・マルテッロにより提供された。彼の編んだ「第一案」や同じマルテッロに帰される銘文等から、描かれたものがほぼ同定される。

ポッレッタは十五世紀末以降ラヌツィ領となっていた。同家の紋章にはペガサスがあしらわれている。先行研究が認める通り、この天井画は、ポッレッタの温泉を、ペガサスが湧かせたカスターリアの霊泉と比べ、ラヌツィの豊かな土地を讃えているのだろう。そこは古代より温泉で名高い。画面のパルナッソスには医神アスクレピオスも登場して、父アポロンにポッレッタを指さす。マルテッロも書くように、それは同地の湯のもつ治癒効果に言及している。当時のラヌツィは、その封土の境界を自らに有利に確定していた。カザーリ・ペドリエッリは、装飾計画の動機としてこの出来事を強調する。

以上の事実と解釈を踏まえつつ、本発表では、このイメージの成立の要因について考察を深めていく。マルテッロがピンダロスの『ピュティア祝勝歌集』を契機にプログラムを着想した可能性を、まずは指摘したい。その第一歌では、アポロンの堅琴とムーサの歌舞が描写された上で、エトナ山麓を支配して新都市を建てたヒエロンの功績が讃えられる。第三歌では、病に悩むヒエロンを慰めるため、アスクレピオスの神話が叙述される。この詩を精読してフレスコ画を細部まで観察することで、当の図像がラヌツィ家内部の後継をめぐる状況をも示唆するために案出されたと主張したい。

発表者はまた、銘文でアスクレピオスとされる像にピンダロスが重ねられた可能性をも挙げたい。ベッローリがピンダロスと記した、ラファエッロの《パルナッソス》の人物像と、それは類似する。このピンダロス受容の意義を明らかにしたい。ビガリのピンダロスはマルテッロとも同一視されただろう。その仕掛けがアスクレピオス誕生をめぐる物語を画面に引き起こすよう期待されたことを、「第一案」と完成作の違いやラヌツィの歴史、他の典拠をも考慮して論じたい。加えて、作者がパルナッソスで語るというその設定がマルテッロも与していた文学的伝統に負うことに触れたい。

ラヌツィ館のビガリ作品は、形式と物語表現の「繊細さ」の点で、従来の天井画とは一線を画する。これがマルテッロの修辞学と親和性を持ち、バロックを超える新たな「良き趣味」を具現することを、最後に説明したい。